

# 立命電友会

## 立命電友会会長就任にあたって

荒木 敏  
(昭和三十四年卒)

私は、去る平成十六年六月五日、大津プリンスホテルに於て開催されました第四回・立命電友会総会に於て、関係各位のご推挙のもと【立命電友会会長】に選出されました。

向こう四カ年にわたり、その大役に就くことになりましたので、ここに会員の皆様にご挨拶を申し上げます。

私にとりまして、会長の大役を仰せつかるなど思いもかけぬ法外な事態であり、どの様な心構えで、どの様にご挨拶申し上げてよいものやら途方に暮れている次第です。



会員の皆様は既にご承知の通り、我が立命電友会は、今や、一万人を超える会員数を保持し、早いもので本会発足以来すでに十三年を経過しました。そして、電気工学関係学を学んだ者が、単に集うと言うことのみで留まることなく、平成十二年以降は立命館大学の正規認定同窓会の一つである理工学部全体の同窓会組織（理工学部同窓会連絡協議会）の一員となり、大学のれっきとした団体として登録されるに至っています。この事により、立命電友会の運営上極めて重要な事柄の一つである財政（金銭）面において、一定の見通しを立てて年間を通じて運営できる様になったと言えます。これはこの理工学部同窓会組織の一員であることよってはじめて可能になるのですが、学生諸君が四回生時に加入手続きが終身会費納入を伴って、大学窓口にて執り行われ

ると言う電友会事務局にとっては、とてもありがたい事務実態へと様変わりしたわけです。この様変わり、立命電友会運営の礎が構築されていることをご理解願います。この事務手続きの変化こそが、諸先輩方・諸先生方が本会を設立、発足させてくださったお陰そのものであるわけですから。任意団体を運営するとき、その基本となる人員やその名簿、そして活動する人、場所など大切な物はいろいろあり、どれ一つとして欠かすことは出来ませんが、極めて大切なことは財政（金銭）の安定とこれが確保されることです。ここでご報告も兼ねて触れておきたいと思った次第です。

立命電友会発足以来十年余り、整備された体質まで組織を発展させ、活動させてこられた初代の得田会長、二代目の池田会長、さらに三代目の加納会長のご尽力は、いかばかりであったことか。そして、補佐されてきた副会長をはじめ役員の方々、さらに実務を採配されてきた事務局担当の先生をはじめとする諸先生方のご苦勞を思ふ時、唯々、感謝、感謝です。先日の会長各位のご尽力、ご功績をこの肌身で感じておりましたので、その後を引き継いで、私ごときに出来るものではないと思いましたが、従って、お話をくださった方にご辞退を申し上げました。しかし、もう一度よく考え直して見ますと、ここまで整備いただいている組織であり、新たに就任いただくであろう新副会長や新役員の方々が、そして会長ご経験諸兄方が顧問としてお残りいただいている過去の

実態。その上、経験豊富な先生方で事務局を固めていただいている現況。すると何ら問題なき安定した組織の姿等々を私なりに予感。そこで、これまでの種々の感謝の気持ちをお返しできるのでは無いか。私にまだパワーが残っているとするならば、皆さんのお知恵でそれらを引き出していただき、使っていただこう。そうしたことがご懇情いただいた皆様への感謝の道に通じることにはなるのでは無いか。それが学園と卒業生の橋渡しへのお手伝いになり、時として学園への応援的な役割を果たすことになるのではないかと。こんな風に思いを変え、非力を顧みる事無く会長をお引き受けすることになった次第です。

昭和四十三年、四十四年頃、全国的に学園紛争と言われ、我が立命館大学も騒然と荒れ狂っていた時、電友会結成・設立の基礎資料となる名簿などがすべて散乱、逸脱してしまい、その後の回収、再整備、設立構想、組織の骨子づくり等々、その間のご苦勞、ご尽力は思い出しただけで遠くになりそうです。こうした時期の辻村先生をはじめとする諸先生方や諸先輩方のご努力があって、今日の《立命電友会》が存在していることをここに述べておきたいと思えます。

（この間の事情は、平成十四年十月一日発行第二十号、辻村先生ご寄稿記事をご参照下さい）

ところで、立命館大学の立派な変貌ぶりは目を見張るものがあります。広小路から衣笠への学舎統一、BKC開設、大分のAPU開学、中学校の開校、高校の合併・開校、小学校の開校（準備中）等々、卒業年代によつては、当時を思い起こすことすら困難な程の変わり様です。その変貌ぶりは、世間の一部には「見る角度や時期にもよる」とか「瞬間風速」とのご意見もあります。《本場に強い大学・これが日本のベスト三十私大だ》で『第一位・立命館大学』とのランク付けを報道され（週刊・東洋経済二〇〇四年十月九日・特大号）、注目されたのは記憶に新しいところですが。

目を転じて理工関係を見ても、情報理工と言う新しい学部が新設され、学科名称、学科数が大きく生まれ変わる中で、「電気」と言う文字が残されているのに、何か救われた思いが湧いてきます。これは私の卒業年次の所為でしょうか。それとも年齢の所為でしょうか。いずれにしても、年次は違っても同じ学科を学んだ者同志が集う《立命電友会》が、卒業生と学園の橋渡しの役を果たし、さらには、学園発展への応援的な役割を集団として、個人として果たすであろうことを互いの「よりどころ」に会の発展を願おうではありませんか。そうした電友会活動の中でお手伝いの使い走り役が私に出来たならば、感謝の表れとご理解ください。

会長という大役を仰せつかった今、意を決してお引き受けではありませんが一杯です。会員各位のご支援、ご協力を頂きながら、誠心・誠意、努力して参る覚悟ですので、どうぞよろしく、お願い申し上げます。

これまでの企業経験を活かして

非常勤講師・立命電友会事業幹事

津田 見真

(昭和四十四年卒)

大学の知的資源の産業化を促す産学連携が盛んに行われている。また企業と大学との共同研究も活発になってきている。その一つの象徴が文部科学省「21世紀COEプログラム」である。これらの取組みにより創造される知的資源の活用が重要となっている。大学にとって企業との連携は研究と教育の活性化にもつながり、企業も多岐の分野にわたる高度な知識ベイスが必要となってきている。一企業ですべて担えるものではない。近年の科学の進歩は従来の科学の延長線上に進んだものではなく、その科学の本質を問い直す技術へと大きく変革している。すなわち物質の製造、加工、制御技術を分子サイズのレベルまで微細化する技術で、生物学、化学、物理学及び医学をみなおし問い直す学問へと大変革している。二十一世紀は原子や分子を完全に制御してあらゆるものがつくられる時代になるといわれている。つい最近までは神の領域とされていた分野である。今後産学連携による事業活動はいわゆるナノテクノロジー、ポストゲノム、エコビジネス、伝統技術の活用や文系分野にも及ぶ。特

に中小企業も専門技術では素晴らしいものをもっており、アイデア一つで大きなビジネスチャンスとなる。政府も景気対策上、知的クラスター事業を設けてインキュベータ施設の建設など新事業創出を促進している。

私は昨年、小松研究室がE社から受託した新しい構造のコアレスモータの研究に客員研究員として参加し、小松教授、学生達やE社と共にテクノコンプレックスで取り組んだ。この環境のよい未来型キャンパスで更なるチャレンジをしたいと思っている。

これまで私は三十年余りの技術・現場での仕事を通し、多くの専門的知識を身につけることができた。以下に、印象に残るいくつかについて述べてみたい。

(1) 学生時代の卒業研究は辻村寛先生に指導して頂き、インパルス電圧を交流波と重畳させて絶縁物の破壊の状況を調査研究していた。学園紛争の多忙な中で辻村先生と学部学生、大学院生とで火花放電理論(三好保憲著)のタウンゼント理論、Meekの理論、Raetherの理論など夜遅くまでゼミで勉強したのを覚えて

ている。今でも高電圧工学は絶縁問題を解決する場合の基礎と思っている。

(2) 二十八才の時(三十年前)、井上和夫先生に夏休みにBerkeleyに社会探訪で呼んで頂き、先生のマンションに泊めてもらって付近を約四十日間旅行し、大変お世話になった。カリフォルニア大学(パークレイ校)や付近の雰囲気味わうことができた。グランドキャニオンにも行きアメリカのビッグさと寛容さに魅了された。

(3) 井上電機時代には電力用遮断器の設計開発に携わっていた。電力機器の据付調整でインドネシア、フィリピンなどへスパーバイザーで出張した。特にインドネシア、住友化学およびアサハンアルミによるアサハンプロジェクトに参画した。このアサハン水力発電、超高圧二七五kV送電システムによるアルミ精錬所建設プロジェクトは電気雑誌「OHM」(オーム社・昭和五十七年二月号)にも掲載された。(写真1)

(4) 日本道路公団の高速道路でのトンネル照明コントロールセンター、トンネル換気のジェットファンコントロールセンターや北海道の道路ヒーティングコントロールセンターの電気室建設で全国六ヶ所六年間、現場代理人や監理技術者で出張滞在了した。(写真2)

(5) JISやJEC遮断器専門委員会委員、京大での電力工学研究会(上之園先生)、大阪電機工業会(JEMA)の電力使用合理化対策委員会委員の経験や、関西電気協会京都支部(関西電力)の電気主任技術者の講習会で自己研鑽を重ねた。社内(井上電機)ISO9001、ISO14001のシステム構築や認定取得指導経験を積んだので、これらの総合的な知識を活かして異分野への資格(ISO9001、ISO14001の審査員資格)を得ることができた。

(6) 我が家には趣味と実益を兼ねて太陽光ソーラー発電(標準家庭用三・五kW、京セラ製)を八年前に計画設置した。今までに雷サージで一回地絡継電器が動作したのみで順調に稼働している。以上の企業経験や個人経験を活かして、これからも電子システム系の非常勤講師および小松研受託研究員として微力を尽くしたい。

は伊藤氏(後に関西電力社長)であった。



写真3 鹿児島 国分単人道路



写真2 アサハンアルミ技術指導研修会(インドネシア)(左手より3番目)



写真1 275kV 超高圧変電所(インドネシア)

# 学生生活を振り返って

## 諏訪 正樹

(平成四年学部卒)

気がつけば立命館大学の理工学研究科博士後期課程を修了して九

年目に突入しようとしています。この間紆余曲折ありましたが、幸いにもエンジニアとして研究開発に没頭する充実した日々を過ごすことができております。振り返ると、立命館大学における九年間の学生生活もこれに負けずとも劣らない充実ぶりであったような気がします。

私が電気工学科の門を叩いたのは一九八八年、その年初には一ドル一二十八円にまで進行した円高が示すようにまさにパブル景気へ向かってまっしぐらの、(受験競争から解放されて浮き足立っていた私も含め)なんとなく世間がざわざわしていた時期でした。学生生活を悔いのないものにしようと入学当初心に決めたのは、①興味をもったことには幅広くどんどん取り組もう。②寝食惜しんで取り組めるもの一つは見つけよう。の二つでした。①については、オートバイやスキー、サッカーなどのレクリエーション、様々な業種のアルバイトだけではなく、本業の

学問でもそれなりにできたのではないかと思っております。幅広い教養を身につけるチャンスは今なくしていつぞやの心がけ自体は間違っていないかとは思っております。何を本末転倒したのか単位を取得することに執心していたのを覚えています。要卒単位数の二倍とまではいきませんでした。卒業証明書に記された二一〇余りの単位取得数を見て一人悦に入っていたのも、今となっては若気の至りのご愛嬌としかいいようがありません。

②に関しては何とか目標を達成できたのではないかと思います。一つは学部二回生のときに出会ったクラシックギターです。バッハの生み出す緻密な音の構成に魅了され、それこそ寝る間も惜しんで(実験レポートの提出が間近であることも忘れて)、譜面を追いかけていました。この趣味は今でも続いております。京都のとあるギター合奏団の一員として活動を続けています。そしてもう一つの熱中できるものが、今の飯の種にもなっている数理工学です。

電気工学科を選んだのは、中学時代にBCL(電友会の先輩諸兄の中には、懐かしい響きに感じる方もおられるでしょう)に熱中したことや、父が趣味でオーディオ用真空管アンプを自作していたのを横で見ているのをきかっけに、電磁波を使った情報伝達のしくみや各種トランスデューサのしくみを本質的に解明したいというのが大きな理由でした。しかしながら、いざ大学で勉強を始めると、電気の世界以上に私を惹きつけたのは、様々な工学的知見の背後に潜む数学の美しさでした。電磁気学の講義の中で明快に導出されたマクスウェルの電磁方程式にも感動したのですが、その道具となったベクトル解析の諸定理の美しさにはただただ唸らされるばかりでした。また電子回路の講義で分かり易く示されたトランジスタの動作原理により、趣味のエレキギターで使っていたエフェクターのしくみを解明できたのもそれはそれで非常に感銘を受けたのですが、その背後に潜むフリーエの変換の意味を理解したときの衝撃はそれを上回るものでした(電気工学科の学生としては落第かもしれません)。

以上のような経緯もあり、卒業研究では、分野は何であれ数学で裏打ちされた理論の追及に取り組

みたいと思うようになっていました。幸いながらにして、電気工学科にもうってつけの研究室がありました。後に六年間お世話になることになる杉本末雄先生の研究室です。杉本研は確率システム制御工学を土台とし、画像や音声を含む不規則信号の数理的解析をメインテーマとする研究室です。杉本研では、思う存分理工学の世界に浸ることができました。卒業研究ではボルツマンマシンのような確率的探索法を用いた組み合わせ最適化問題に取り組んでいました。博士前期課程に進学してからは画像処理に特化した研究に従事しました。問題設定として、ノイズで劣化した画像の修復を取り上げ、マルコフ確率場やウェーブレットといった数学を駆使しアルゴリズムを構築するという内容でした。学部生時代の不勉強もあり、初めて目の当たりにする難解な数学ツールが多かったのですが、先生の指導のおかげもあり、何とか使いこなせるようになったと思います。

修士課程の一年目も終わりに近づこうとする頃から、就職するか進学するかについて大いに悩みました。将来の進路としては、大学に残って教職を目指したい気持ちと企業のエンジニアとして、研究成果を商品として世に出したいという気持ちが半々で揺れ動いてい

たのですが、近い将来グローバル化が加速する中で、学位(およびそこに裏打ちされた専門スキル)は必ずや強力な武器になるであろうと考え、最終的には博士後期課程に進学することにしました。進学したのは学年で一人だけ、先輩も一人だけという状況の中で、この先どうなるものかと不安で一杯でしたが、(持ち前の楽観的な性格もあって)懸命に取り組めば道は開けるだろうと覚悟を決めました。非一様なマルコフ確率場に基づくサンプリング手法を画像処理に活かすという電気工学科としては異色な(?)テーマでしたが、先生のご指導の賜物もありまして無事三年間で学位論文の形に仕上げることができました。

あらためて立命館大学で過ごした九年間を振り返ってみますと、つくづくいろいろな人のご指導ご鞭撻なしではここまで来られなかったことを痛感します。学生生活で蓄積した財産は、仕事に限らず、今まで以上に活用していこうとあらためて思った次第です。

最後になりましたが、このような振り返りの機会を、会報への執筆という形で提供していただいたことに深く感謝いたしますとともに、拙文へのご容赦何卒お願い申し上げます。

# 大学生生活八年間の自己回帰

中室 健

(大学院理工学研究科)

私は一九九八年四月に国立沼津工業高等専門学校から立命館大学三回生に編入してきました。ひとり入学式の会場を間違え、誰もいないBKキャンパスに来たことが私の大学生活の始まりでした。当時は奈良の自宅から電車とバスで往復四時間ほどかけて通い、土日はアルバイトをしながら生活していました。そのため友達を作ることが難しく、編入して一年目の後半には単位取得が著しく悪化し、果てや五回生まで行くことになってしまいました。そのかわり、自分と向かい合う時間を多く持つことができ、今振り返れば貴重な時間を過ごしていたと思います。

いっぽうで研究室の配属は、杉本末雄先生のもと、仮配属という形で居候させていただくことになりました。そしてこのことが私にとって大きな助け船であったことはいまでもありません。研究室に自分の机と友人をもつことができ、大学に居場所ができました。仮配属であったため、同期の友人が卒業研究に追われる中で、独りのんびりと基礎的な数学(集合論や複素関数論など)を納得のいくまで勉強することができました。

やがて学部生活がおわり、もとより考えていた修士課程へと進学することとなりました。大学生活にも慣れると精神的にも余裕がでてまいり、本来の冒險好きな自分もどってきました。他の学部の講義をのぞいたり、国際交流企画に参加したりと、私にとって大学はいろんな世界を垣間見ることのできる刺激的な場所となりました。また、この頃になると、工学的な問題を考える際に基礎となる、空間、ノルム、距離といった数学的構造を自由にイメージできるようになり、いよいよ研究が面白くなってきたのです。同時に私は小さい頃から好きだったコンピュータを通して、理論的なものを土台に、何か世界と相互に作用するモノを作りたいと思うようになりました。それでは実際に、モノ作りの現場をのぞいてしまえと、組み込み機器を扱うソフトウェア系ベンチャー企業のアルバイトを始めました。実はその当時、私のソフトウェアに関する知識は初心者同然でした。そのため何でもよいからソフトウェアの開発手法を一つ盗み覚えて、研究室に持ち帰ろうと考えながら仕事を

していました。これは自分の中でも大きな経験となり、そこで学んだことは今日の研究にたいへん役立っています。やがてまもなく、その会社に就職するということになったのですが、今度はずっと数理的な知識を深めたいという欲がでてきて、結局、内定を断って博士後期課程への進学を決めたのでした。まるで計画性のないアドホックな人生に思えますが、決して何も考えてないわけではないです。私の生き方は、葉に落ちた水玉が重力の方向へ向かいつつも、決して無理をせず、葉の脈目と弾力に緩やかにしたがって転がり進んでいく様子に似ているのかもしれない。目標はいつも遠くに見えており、その間の道のりはどのようなものであっても、常に夢に向かう勢いと方向性だけは失わなければ良いと考えています。

人間の音声は声道の共振スペクトルにより特徴づけられ、サウンドスペクトログラムにフォルマントと呼ばれる黒い帯状のパターンとして表れます。このパターンを見ることが可能です。そこで本研究では、このような音声のスペクトル推定法について研究を行ってきました。また、文字情報を提供する技術として、音声認識システムがあります。現状では文法構造や録音環境などの制約が多く、話し言葉や実環境における利用にはまだ挑戦すべき課題が多くある技術です。観音システムにおいては、特に非文法的な自由発生音に対する実時間音声認識を課題としています。そのため、単語辞書に依存しない音素レベルの音声認識システムの構築をひとつの目標としています。いっぽうで、文字情報のみでは得られない話者の声の強さや高さを推定し表示する研究も行っています。最終的には、これらの音声情報を直感的に理解できるような可視化方法を考えなければなりません。音声信号が聴覚器官を通じて周波数分析され、大脳で言葉として認識されるまでの聴覚系の情報処理を視覚系で代行しようというわけですから、実際には聴覚系と視覚系の情報処理機構の知見が必要であると思います。もと

と、脳や心の存在に興味があったので、時々そのような分野の書籍に目を通し、何かヒントになることを探したりもしています。現在の研究は数理アルゴリズムの開発とソフトウェア構築の往復で、頭の切り替えが多く大変ですが、理論が目に見える形で実現されていくのはとても面白く、研究活動を通して理論を実践に応用する思考訓練ができたと思います。また、年に何度か地方や海外で開催される学会に参加する機会をたいへん多くいただき、研究発表や他の研究者の発表を聞くことで、自分の研究を客観的に評価する目を養うこともできました。

私はこの大学生生活を通して、たいへん多くの経験を得ることができました。そして今、自分の心の中で、ゆっくりと時間を流して物事を思惟できる贅沢さにとても幸せを感じています。私には近い将来、この大学生活を通して得た全てが、豊かな実りとなって収穫される様子がとても色鮮やかに見えます。

最後にこのような表現の機会をいただきましたありがとうございます。また、学びの場と機会を与えてくださった杉本末雄先生をはじめ、ご指導、ご支援いただいた諸先生方、先輩、友人、後輩、家族の皆様には、今後の自分の活躍をもって感謝の意を表わしていきたいと思えます。

二〇〇四(平成十六)年度  
電子システム系卒業生進学・就職状況

二〇〇五年三月に卒業した院生、学部学生の進路・就職状況は別表の通りとなりました。

ITバブルの崩壊の後遺症もや癒えて二〇〇四年十一月頃は、「就職内定率三年ぶりに改善」、「などと新聞紙上で報じられました。が、求人各社の採用基準は例年にも増して厳しく、「採用予定人数を割り込んでも基準以下の者は採用しない。」という方針の企業が多く見られました。

電子システム系の学生の主たる就職先としては、例年通り電気機器メーカーや自動車関連の機械メーカーが圧倒的に多く、これらの業界は、学生の関心や、応募も一番高い分野です。機械器具、化学、土木、環境など異業種の求人も随分ありましたが、学生の関心、応募はいまひとつでした。また、企業の分社化、労働の流動化などの影響で情報・システム、サービスのソリューション、アウトソーシングといわれる分野の求人が増加し、この分野への就職学生も増えていきます。

今年度の求人企業数は昨年に比べておおよそ五割増で、求人側の採用意欲の旺盛さは見られたものの、就職決定率は例年どおりの結果でした。しかし、電気・機械メーカーをはじめとする多くの上場企業に

多数就職しており、大勢の先輩方のご指導、ご支援を頂きました。この場を借りまして厚くお礼申し上げます。

また、すぐれた会社であっても、異業種やコマースに登場しない業種、職種には先輩方を通して折角の求人を頂きながら、応募する学生がいけない状況も多々あり、申し訳なく残念に思っております。今後とも、なお一層後輩へのご指導、ご支援を賜りますようお願いいたします。

(就職委員 溝尻 勲)

I. 卒業者・進学者・就職者一覧

(2005年3月10日現在)

	卒業者	進学者	就職者	活動中
大学院(電気)	81	6	75	0
大学院(光工学)	33	2	30	1
電気電子工学科	126	73	42	11
光工学科	134	76	50	8
合計	374	157	197	20

II. 就職先一覧

(大学院・修了生の就職先も含む)(順不同敬称略)

業種	企業名	
電気・電子機械	アイ・オー・データ機器、アイシン精機、アコース、アルプス電気、アンリツ、NECエレクトロニクス、NECシステムテクノロジー、エプソン・マレーシア、遠藤照明、オービック、オブテックス、オムロン、オリンパス、キャノン、キャノン販売、京都製作所、クラリオン、光洋サーモシステム、コスモ電子、サイレックス・テクノロジー、三協精機製作所、サンケン電気、三洋電機、サンワテクノス、CKD、シャープ、ソニー、ソニーイーエムシーエス、ソニーセミコンダクタ九州、ダイキン工業、大東製機、TOWA、TDK、デンソー、東京エレクトロンAT、東芝、ナナオ、ニコン、日亜化学、ニチコン、日研総業、ニッソーサービス、日本コンピューターシステム、日本電子材料、パイオニア、パロマ、バンテクノ、日立産機システム、日立製作所、日立マクセル、富士通、富士通VLSI、富士通デバイス、富士通テン、船井電機、ブラザー工業、ホクショー、マイクロクラフト、松下エコシステムズ、松下システムテクノ、松下電器産業、松下電工、ミツテック、三菱重工業、三菱電機、村田製作所、リケン、リコーエレメックス、リコーテクノシステムズ、リンク・ワン、ローム (71社/127名)	
電力	中部電力	(1社/1名)
自動車	カミッグ、スズキ、ダイハツ工業、トヨタ自動車、本田技研工業	(5社/9名)
鉄鋼	日本車輛製造	(1社/1名)
運輸・通信	NTTデータ、NTTデータ関西、NTTデータ三洋システム、九州旅客鉄道、KDDI、ソニーコンピュータエンタテインメント、日本テレコム、東日本旅客鉄道	(8社/8名)
放送	ジュピターテレコム、毎日放送	(2社/2名)
建設	東洋エンジニアリング、日本電気システム建設	(2社/2名)
印刷	進洋、凸版印刷	(2社/2名)
情報・システム	イーウェアブ、イーテック、NTTアドバンステクノロジー、NTTファシリティーズ、コア、三洋LSIデザイン・システムソフト、島津エス・ディー、ソニー・エリクソンモバイルコミュニケーションズ、デンソーテクノ、東芝マイクロエレクトロニクス、東洋ビジネスエンジニアリング、ニフティ、日立情報システムズ、日立ソフトウェアエンジニアリング、富士通関西システムズ、北海道ビジネスオートメーション、安川情報システムユーフィット、リクルートスタッフィング (19社/20名)	
その他	INAX、茨木市役所、宇宙航空開発機構、NOK、大阪税関、岡村製作所、オリックス・オート・リース、ガンコ、京進、公務員、興和、島根県警察本部、神栄、セガアミューズメント、テルモ、徳島県警察本部、ニューギン、ノバレーゼ、メイテック、ヨドバシカメラ、ライフフーズ、レイトロン、国家公務員Ⅱ種(四国地方整備局)	(23社/24名)

### 同窓会だより

#### 立命館大学32電友会が「古希の集い」を開催しました

今年は七十歳の節目の年にあたることから、少々贅沢をして十月二十九日(金)に、辻村寛先生、前田稔夫先生ご臨席のもと総勢二十九名が出席して、三重県鳥羽市のエクシブ鳥羽アネックスで「古希の集い」を開催しました。また、翌三十日(土)にはイルカ島を見学し、昼食は観光船上でバーベキューを楽しみながら歓談しました。

立命館大学32電友会は、理工学部電気工学科を昭和三十二年に卒業または昭和二十八年に入学者の集いであり、親睦・激励・團結を目的にした同期会です。卒業後は5年毎に開催してきましたが、平成六年以降は、隔年の、平成九年以降は毎年の開催となり今回が十八回目となります。

本会員にとって古希は還暦に次ぐ二度目の長寿の賀であり、これから本格的な賀を迎えることから、お互いの健勝を祈念し、再会を約束して散会しました。

《立命館大学32電友会のHP》  
<http://homepage3.nifty.com/32denyukai/index.html>



#### 燦燦会 (昭和三十三年卒)

平成十六年の燦燦会(昭和三十三年卒同窓会)は九月十一日に京都四条大橋西詰四条下ル「陣の花」で開催され、参加者は三三名であった。顔ぶれはほぼ定着しているが、数年振りに元気な顔を見せる者もいて話はずむ。

私達の同窓会は卒業後比較的に早くから数年間隔で会合を開催し、五年前までは三年ごとであった。現在は毎年、主として京都で開催している。

私達の同窓会は、同級の井上・浦山君が電気工学科の教授として母校に在職していたこともあり、大学の様子がよく伝わり電友会総会の参加者も比較的多かったと思う。大阪立電会の総会は、毎年、大阪弥生会館で開催されているが、平成十六年の総会には参加者約四〇名中、三十三年卒は一〇名を数えた。これは大阪立電会の会長が同級の稲越君であったことにもよると思うが、電友会、立電会の行事には燦燦会として今後も積極的に参加していきたいと思っている。

(井上 記)



#### 杉本研究室同窓会「参士会」

昨年十月十六日(土)に、立命館大学ローム記念館にて記念すべき杉本研究室第一回同窓会を行いました。杉本研究室は一九八八年四月に発足し、第一期生にあたる卒研生は翌年四月から配属されましたので、研究室の活動としては十五周年目となります。この同窓会の名称は開催するならば第三土曜日という意味で「参士会」と命名させていただきました。同窓会当日は在校生を含め総勢約〇名の参加者が集まり、杉本先生の挨拶にはじまって、しばらくの間、琵琶湖ホテルの料理に舌を鼓みながら歓談しました。その後、同窓生の写真と時事が流れゆく動画を観賞したところで、杉本研究室恒例の「所感」を行いました。先輩を前に緊張した在校生の所感に始まり、各期生にわたって年季の入った所感を聞くことができました。時間はあっという間に過ぎ、最後に同窓生から杉本先生に花束が手渡され、皆で全体写真をとりました。

本同窓会は数年間隔で開催する予定ですので、今回参加することができなかつた方々も、ぜひ次の機会に元気な顔を見せていただき

たいと思います。

また、ご参加いただいた同窓生の方々には、過去の学会発表論文のPDFを集録しました(CD-ROM)を記念品としてお配りしました。まだ若干残っておりますので、参加することができなかった方はご連絡いただければ郵送いたします。また、このたびの同窓会のお知らせが届かなかつた同窓生の方々は、住所と電話番号をご連絡いただけますと幸いです。

連絡先(九十七年卒、久保幸弘)..  
 ykubo@se.ritsumei.ac.jp



電友悟空会

(昭和五十九年卒)

卒業してから二十一年目、第九回目の電友悟空会が平成十六年十一月十三日に京都で開催された。いつもは、日常の忙しさを青春時代の記憶はどこかに飛んでしまっているが、このときのみ心は学生時代に戻る。毎回、どのクラスが出席率が高いかということが話題に上がる。一昨年はBクラス、昨年はCクラスであった。私はAクラスであるが毎回ビリであり、少々肩身が狭いかな。しかし、東京、名古屋と京都に出席しているので、まあ許してもらおう。

話題は、高山教授から立命の近況の話や仕事の話もあるが子供の話題も多い。子供が受験を迎えている。同志社を受けさせたいとか言っているのも聞こえてくる。あらためて自分の年を知る。みんな良き父親になっている。今回の開催場所は品数が多く一八時三〇分より開始したのに最後のデザートがでてきたのが二二時を超えていた。しかし、あつという間に楽しい時間は終了した。そういえば一昨年前は、別府湯布院や滋賀の温泉での開催の話も出ていた。来年は、どこで開催されるかなーと楽しみにみである。 生田一恵 記

辻村・前田・浦山研究室 同窓会

同窓会

師走の十二月四日、京都は東山の「山麓の宿ホテルリョウゼン」にて、五十名の会員が集まり同窓会をおこないました。昨年六月の辻村・前田研と浦山研の合同同窓会を一步進め、銀行の統合・再編のごとく、辻村・前田・浦山研究室と川畑研究室の同窓会へと発展させた初の合同の同窓会となりました。冒頭の総会では同窓会の各議案、規約を採択し、名実共に同一同窓会が結成されました。続いて辻村、浦山両先生から各々の研究室発祥の思い出を述べられ、浦山先生の乾杯の音頭で開演しました。宴中の出し物として辻村先生と幼馴染のホテル女将との対談(漫談)で一気に盛り上がりま

した。(写真) 二次会では場所を同じくし、綺麗どころ四名の参人もあり、暴走もなく非常に華やかなカラオケ大会へと進展し、あつという間の三時間半を過ごしました。最後に次回平成十八年六月の開催を確認しお開きとなりました。ご参加いただいた皆さんお疲れ様でした。次回にはより一層多くの方が参加し、本会を盛り上げていただきますようお願い申し上げます。

追記 通信費として千円を九一名の方からカンパを頂戴しました。改めてご協力いただいたことにつきまして感謝申し上げます。 八十年卒 加藤



学系便り

平成十七年度の電子システム系の主な役職

- 電気電子工学科
  - 学科長 小松 康廣
  - 就職委員 沼居 貴陽
- 電子光情報工学科
  - 学科長 藤枝 一郎
  - 就職委員 齊藤 茂
- 電子情報デザイン学科
  - 学科長 山田 喬彦
  - 就職委員 寺井 秀一

【新任】

泉 知論 平成十七年四月一日、電子情報

デザイン学科助教教授に着任。 小矢 美晴 平成十七年四月一日、電気電子工学科任期制講師に着任。

計報

卒年	氏名
昭9年	浦木元春繁 平成16年5月19日
昭33年	山口 裕三 平成16年10月
昭41年	澤藤 忠彦 平成16年3月
昭46年	近藤 寛 平成16年9月22日

事務局便り

立命電友会会報二十五号の発行にあたり、ご寄稿いただきました皆様方には、心より御礼申し上げます。学生時代を振り返ってとか同窓会の開催など随時ご寄稿を賜りたいと思います。住所及び勤務先等の変更がございましたら、ご連絡のほど宜しくお願いします。

立命電友会連絡先  
〒五二五-八五七七  
滋賀県草津市野路東一-一  
立命館大学理工学部電子システム系内  
立命電友会事務局 川畑 良尚  
富林(月・木)  
電話 〇七七(五六)二六六二  
FAX 〇七七(五六)二六六三  
E-mail: denyukai@nl.ritsumei.ac.jp  
http://www.ritsumei.ac.jp/se/re/denyukai/  
(会報の題字は久保之俊氏)